

読書を例にした身に付けて欲しい力

①その書物の内容を理解する力。

その書物には何が書かれているのか。

②①で理解した内容について、問題点を発見し提出する力。

疑問点、不十分な点、論理的に納得いかない点、など。

③②で発見し提出した問題点に対して、自分自身の回答を出す力。

自分ならこう考える。こういうことが補充できる。

※以上のことは、読書に限らず、情報の受容全般において、心がけてほしい。

「正しさ」についてのメモ

* 少し難しい言葉を使っていますが、言っていることは、簡単なことです。

・「正しさ」は、あらかじめ、客観的なものとして存在してはいない。

・「正しさ」「正しいということ」自体は、説明しつくせない。

・例えば、「この文章は、文法的に間違っている。」というとき、その判断の根拠は、その文章が書かれた言語の文法体系や語彙体系にある。しかし、その文法体系・語彙体系の正否の判断基準たり得る「正しさ」は、どのようにして説明できるのでしょうか。たとえそれが説明できたとしても、その説明の「正しさ」を支えるものは何か。

・このように、「正しいということ」自体は、言い当てることができないのである。

・よって、「正しさ」の絶対性はない、ということができる。

* 「正しい」「美しい」などの言葉によって世界を解釈・判断することは、個人的感想・美意識の範囲ならともかくも、本当は軽々しくはできない。

* 逆に、やたら「正しい」を無反省に用いるのは、それ自体説明不可能であることを故意に無視し、「正しい」という言葉を、それに伝統的につきまとうある種の幻想的な絶対性をたよりに、支配的カテゴリーとして利用しているに過ぎない。これらをいま仮に、「知の絶対主義」、「知の帝国主義的支配構造」と呼んでおこう。

・しかし、「正しさ」「正しいということ」が、どのようにして、我々に認識・判断されるのかは、説明できる。

・「正しさ」は、その時空における、主観の大多数の一致に過ぎない。

つまり「正しさ」は、常に書き換えられる可能性を孕んでいるのである。

・このことを、承知の上で、事象についての正否の判断を下すことは、当然許されよう。

意味が生成されるとき

* 少し難しい言葉を使っていますが、言っていることは、簡単なことです。

今仮にあなたのそばの机の上に清・仇兆鰲著『杜詩詳注』と題する唐代の詩人・杜甫の詩集が置いてあるとしよう。聞き覚えのある詩人の名前やいかにも中国らしいオレンジ色の表紙が気になって、あなたはこの詩集をながめている。

さてこの時、詩集の中に載せられた千四百首余りの作品は、「意味」を持っているだろうか。持っていない。机の上に置かれたままの詩集は、紙でできた無機的な物体にすぎないのである。

では一体、作品はいつ「意味」を持つことになるのか。作品の「意味」はいつ生じるのか。

それは、あなたがこの詩集を手にとって、読み出した時からである。つまり、作品それ自体には固有の「意味」などなく、「意味」は、作品が読者によって読まれるという関係性の上のみ成立し存在するのである。読者であるあなたが杜甫の詩の「意味」を作り出すのだ。

作品の「意味」を、神のような超越的・絶対的存在と考え、その存在（「正解」）にたどりつこうとする読み方なんて、全くもってつまらない。作品を自分のところに引きつけて「意味」を作り出すことが、作品を読むということであり、そして読むことの快樂なのではないだろうか。言葉を換えて言うならば、作品を読むときには、その作品に何が書かれているかではなく、何が書かれてあるべきかを、追求すべきなのだ。

比喩的に言うと、考古学者の遺跡発掘は、遺跡を掘り出しているのではなく、遺跡を創り出しているのである。例えば、秦の始皇帝の兵馬俑はあのようなかたちで掘り出されたのではなく、あのようなかたちに掘り出されたのだ。